

十五少年漂流記

志水辰夫 ● 文

原作 ● J・ベルヌ

絵 ● 佐竹美保



◆ 世界の冒険文学 ◆

苏工业学院图书馆
十五岁少年漂流記



◆世界の冒険文学◆

KODANSHA

志水辰夫・文

原作●J・ベルヌ

絵●佐竹美保

し み ず た つ お
志水辰夫 原作 ジュール・ベルヌ 953

痛快 世界の冒険文学 ①

十五少年漂流記

じゅうごしょうねんひょうりゅうき 20cm 310P

定価は、カバーに表示してあります。

1997年10月16日 第1刷発行

著 者 志水辰夫

画 家 佐竹美保

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21(〒112-01)

電話 出版部 03(5395)3535

販売部 03(5395)3625

製作部 03(5395)3615



印刷所 図書印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Tatsuo Shimizu 1997 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書出版部あてにお願いいたします。

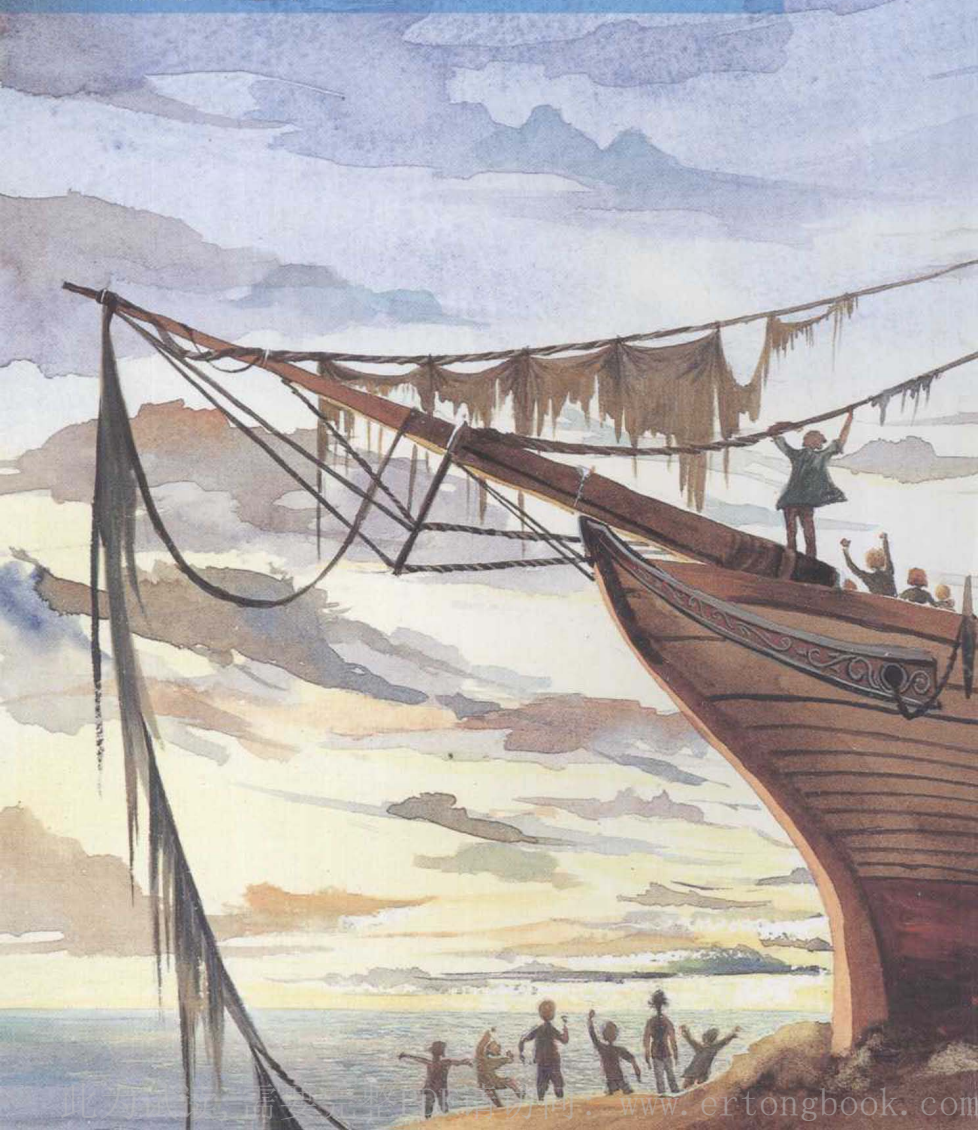
[R]〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-268001-7 (児図)



しずかに夜が明け、太陽が顔をだすと、みんな
は神にむかって、感謝のいのりをささげた。

(本文42ページより)





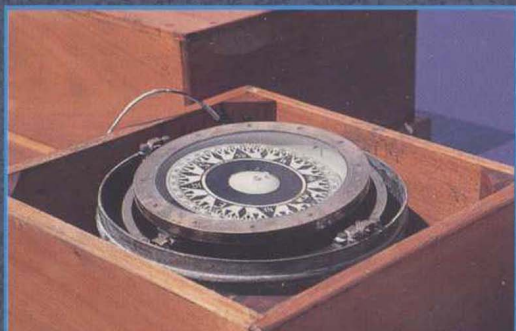
少年たちの故郷、ニュージーランドの
港町オークランド（現在）。

船の方向をきめるとき舵
をあやつるための舵輪。



スラウギ号のモデル、スクーナー型の帆船。

方位をはかる羅針盤。磁石
の針が南北をさすことを利
用して方向を測定する。



十五少年漂流記

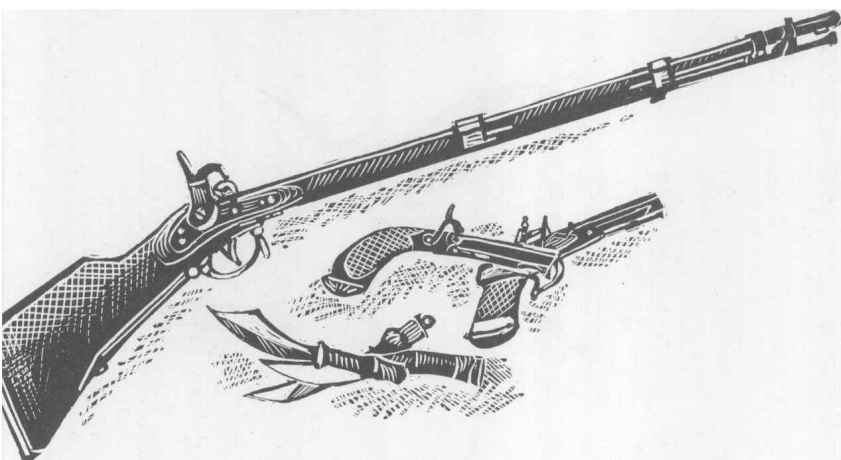
じゅうごしょうねんひょうりゅうき

もくじ

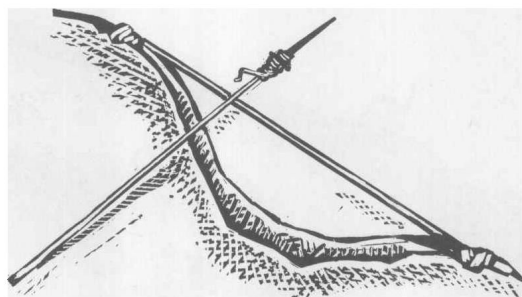
目次



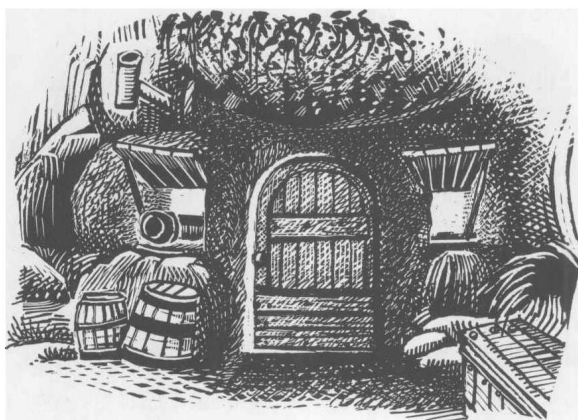
9	荒れくるう海 ^あ9
2	無人の浜へ漂着 ^{むじん はま ひたつちあへ}21
3	なぜ、こんなことに.....32
4	はじめての上陸 ^{じつじへ}41
5	水平線 ^{すいへいせん} 上に見えたもの.....48
6	島 ^{しま} か、大陸 ^{たいりく} か.....58
7	真水 ^{まみず} だ！.....65
8	散らばった白骨 ^{ち はつたつ}72
9	残 ^{のこ} されていた地図 ^{ちず}80



18	二代目大統領選挙の結果 だいにだいとうりょうせんきぎみ けつか	164
17	東海岸をしらべる ひがしかいがん	153
16	クリスマスのごちそう	144
15	かずかずの収穫 しゆうかく	136
14	北海道を探検する きたかいがん たんけん	128
13	きびしい冬を越す ふゆ こ	118
12	大統領の誕生 だいてうりやう たんじやう	107
11	新しい生活になれる あたりの せいかつ	99
10	大ひっこし作戦 だい ひっこし さくせん	88



27	計略 けいりやく には計略 けいりやく を へやじ	255
26	またの名 な をハノーバー島 とう	243
25	逃 に げてきたエバンス.....	236
24	空 そら からの偵察 ていさつ	223
23	ふたたび十五人 にん に.....	217
22	たおれていた女性 じよせい	203
21	難破船 なんぱせん	193
20	仲間割 なかまわ れ.....	187
19	スケート大会 たいかい のできごと.....	174



28 戦闘^{せんとう}.....

265

29 ボートを修理する^{しゅうり}.....

277

30 休暇の終わり^お.....

288

痛快三百科^{つうがい ひゃくか}.....

292

あとがき.....

298

解説^{かいげつ}.....

北上次郎^{きたがみじろう}.....

302





ゴードン

いちばん年上の14歳の5年生。
冷静でしんちょうな性格で、み
んなのまとめ役になる。ただひ
とりのアメリカ人。



ブリアン

13歳の5年生。優等生ではない
が、明るく下級生にもやさしい
ので人望がある。もちまへの勇
敢さでリーダー格になる。
フランス人。



バクスター

13歳の5年生。手先が器用で、
いろいろな狩りの道具や、生活
用品を考え出す、技師のような
存在。イギリス人。



ドノヴァン

13歳の5年生。優等生だが、い
ばりたがりやで、ブリアンには
げしいライバル意識をいだいて
いる。鉄砲の名手。イギリス人。



ジャック

ブリアンの弟で3年生。学校一のいたずらっ子だが、漂流してからは、ひとがかわったように元気がない。フランス人。



サービス

12歳の3年生。ふざけんぼうで明るい少年。冒険小説がだいすきで、いつも「ロビンソン・クルーソー」をひきあいにする。

イギリス人。



ファン

ゴードンの飼犬。狩りや探検のおともをして手がらをたてる。

注●少年たちの学年は原作のままで年齢とは一致しません。



モコ

スラウギ号のボーイの黒人少年。12歳。ぐうぜんに少年たちと漂流することになる。誠実な働きもので、みんなに信頼される。

絵●佐竹美保 装丁●桜庭文一

1

荒れくるう海

一八六〇年三月九日、真夜中。

大海原が猛りくるつていた。風が吹きすさび、雲がたれこめて、海の上に、重くおおいかさっている。視界はゼロ。さかまく波が、白い牙をむいては、くりかえしたたきつけてくる。

その大嵐のただなかを、帆をほとんど失った一そうの船が、漂っていた。スクーナーとよばれている百トンの帆船である。船名が、かろうじて「スラウギ号」と読める。波にさらわれたか、もぎとられたか、船名板の一部が欠けていた。

スラウギ号の船尾では、船の安定を保とうと、四人の少年が、必死になって、舵輪にしがみついていた。十四歳がひとり、十三歳がふたり、もうひとり十二歳の黒人である。

いまでも、山のような大波がおそいかかり、四人を甲板になぎたおしたところだ。

「だいじょうぶか、ブリアン。」

すぐさま起きあがった少年のひとりがいった。

「だいじようぶだ、ゴードン。」

ブリアンとよばれた少年は、舵輪にもどりながら、しっかりと声で答えた。ブリアンは、もうひとりの少年に声をかけた。

「ドノヴァン、しっかりとしろ。船室には、小さいものたちがいるんだぞ。」

ことばにいくらか、フランスなまりがあった。彼は黒人の少年のほうにも、ふりかえった。

「けがはなかったか、モコ。」

「はい。ぼくなら平気です。」

そのとき、船室へつうじる、昇降口のドアが開いた。そしてなかから、少年がふたりと、犬が一匹き、とびだしてきた。

「ブリアン、なにがあつたの？」

「なんでもないよ、アイバースン。心配しないで、船室にはいつてなさい。」

「でも、こわいんだよ。」

「頭から毛布をかぶって、目をつむっているんだ。そうすれば、こわくなんかない。」

「気をつけて！」モコが知らせた。「また、大波です！」

「なかへはいるんだ！」ゴードンが大声でさげんだ。

ふたりがひっこむと、入れちがいに、またひとりでてきた。

「手伝わなくていいのか、ブリアン。」

「いいよ、バクスター。ここは四人でまもるから、きみたちは、子どもたちのそばにいてやってくれ。」

太平洋のまったくただなかだというのに、なぜかこの船には、おとなの船員が乗っていないらしいのだ。百トンクラスの帆船といえば、ふつう船長以下、最低五、六人の船員を必要とする。それなのに、いまこの船をあやつっているのは、十四歳を頭とする、少年たちばかりなのである。しかも船室には、もつと幼い少年たちがいるようなのだ。

たしかにそれは、見るからに、いたいたしい光景だった。嵐はますますひどくなるばかりで、船はこれまで、何度転覆しそうになったかしかない。メインマストは、すでに二日まえ、根もとから一メートルばかりのところで、強い風のため、へし折られていた。残るフォアマストも、てっぺんのところが折れ、いつたおれても、おかしくない状態になっている。へさきでは、ぼろぼろになったジブ（三角帆）が、風にあおられ、まるで銃声みたいな音をたててはためいていた。